

座長コラム「長岡の風」

第14回 2024年12月

「大和の食堂」

長岡経済・産業連携会議 座長：高野裕

①「町に行く」

昔、私が小さかった頃、「町に行く」という言葉は実に輝いていた。

普段は自宅から小学校までの距離が一番遠い私の行動範囲であった。その行動範囲から飛び出すことは未知への行動であり、親から「人さらいについていかるろ」と言われ、「そっすとなぁ」「毎日酔っぱっかのまさいるろ」と言われていた怖い世界なのだった。だが、そんな日常の中で特別の時に、まさにスペシャルなお出かけがやってくる。その時の掛け声は「ほら、町にいくろ」という親の呼び声だ。この瞬間、私は一気に高揚感が高まってくる。その掛け声の意味することは、それは大和デパートの屋上遊園地に行って、最後に最上階の食堂に行ってサンドイッチを食べることなのだ。

②ワクワク感

当時、長岡で一番の場所、今で言うならディズニーランドのような場所が大和デパートの屋上であり、最上階の食堂であった。さらに大和デパートの食堂には特別な場所がある。それは食堂の一番奥の角、そこのコーナーだけは床がワンステップ高くなっている。私は食堂に入ると、その場所を真っ直ぐ目指して進んでゆく。椅子に腰掛けるより前に私は窓際に寄って外を見渡す。そこには、鋸山、八方台を背にした長岡駅舎がみえ、その手前に広々とした大手通り、そして普段見えないお店の屋根。あそこが、映画館だ、ここがおもちゃのヤママルだなどと確認する。まさに私にとってトキメキの瞬間であった。

③よみがえるワクワク感



この時のワクワク感と同じ感覚を今回思い出すことができた。

それは、まさに、あの大和デパートのあった同じ場所に建てられたミライエの入っている米百俵プレイス西館の最上階にある第四北越銀行の社員食堂に入らせてもらった時のことだ。

この眺めは、昔からの長岡人にとっては懐かしい眺めなのだ。こんな素晴らしい

い空間で昼食を取れる第四北越銀行のスタッフは羨ましい限りだ。

④社員食堂



ちなみに、ここは社員食堂となっではいるが、調理人がいるわけではない。自動販売機や電子レンジ、流しなどが用意され、皆でお弁当を広げる場所、休憩所というような活用がなされているようだ。

ということはお昼時以外は空いている空間ということだろうか。なんとも贅沢な空間だ。お昼時以外ならガラ空きということだろうか。せっかくの

空間、何か長岡市民のために活用できたら良いのに、などと思いながら子供の頃のワクワク感を思い出しながら外の景色をいつまでも眺めていた。

